

## 特別緊急共同研究成果報告書

課題番号： 23U-04  
課題名： 被災地域の取り組みの状況を海外に正確に伝えるウェブサイトの運用と効果検証  
研究期間： 平成23年 5月 1日 から 平成24年 3月31日  
研究代表者： 秀島栄三 名古屋工業大学大学院工学研究科 准教授  
(平成24年4月1日から同大学教授)  
所内担当者： 岡田 憲夫 京都大学防災研究所巨大災害研究センター 教授  
(平成24年4月1日から熊本大学教授)  
研究参加者： 渥美 公秀 大阪大学人間科学研究科 教授  
新目 真紀 青山学院大学 総合研究所 客員研究員  
伊藤 孝行 名古屋工業大学大学院工学研究科 准教授  
梶谷 義雄 京都大学防災研究所寄付研究部門 准教授  
神田 幸治 名古屋工業大学大学院工学研究科 准教授  
ショウ ラジブ 京都大学大学院地球環境学堂 准教授  
多々納裕一 京都大学防災研究所社会防災研究部門 教授  
廣瀬 康之 岐阜工業高等専門学校環境都市工学科 准教授  
松田 曜子 (特活)レスキューストックヤード 事務局長  
矢守 克也 京都大学防災研究所巨大災害研究センター 教授

研究要旨： 東日本大震災に見るように被災地の状況および復旧に関する情報は災害の非日常性、専門性、受け手の不安感などによってとりわけ海外においては正確に理解されにくい。一方、インターネットは多様な主体間の相互理解に不可欠な社会基盤となっているが、その効果は必ずしも十分に検証されていない。そこで被災地の状況及び復旧を英語で伝えるウェブサイトを構築し、モニタを集めて調査を実施し、反応を得ることで、被災地の状況に対し、文化的・言語的フィルタを通して理解がなされる場合のコミュニケーションの困難性や対処策を明らかにしようとした。具体的には、遠隔地から被災地支援に貢献したいと考える市民団体に、被災地支援団体のブログ記事などを英語に翻訳してもらい、独自に構築したウェブサイトより発信していく一種の社会実験を行った。同時に留学生や海外の研究者等にモニタになってもらい、レスポンスを求めた。結果としてモニタリングのみならず翻訳プロセスも含め、災害を正確に伝えることの困難に直面した。地域の特徴、方言に込められたニュアンスを理解し、被災者の受け止め方の多様性を理解する必要があるがあった。翻訳団体やサイト運営者など多様な主体の間でこの認識を共有していくプロセス自体が観察に値するものとなった。モニタリング結果からは被災地の状況を一片の記事だけで理解することは難しく、双方向的なコミュニケーションの重要性を再認識するとともに、この観点からウェブサイトの効果検証のあり方についても有効な知見を得た。

## 1. はじめに

大災害直後の社会は様々な面で非日常的な状態となり、さらに余震や降雨が続く場合もあり、多くの人が自分や地域社会の将来について不安を抱くようになる。この不安について掘り下げてみると、人が不安を抱くにはいくつかの要因がある。

一つは現在以降の展開が予測できないことである。余震、二次災害、ライフラインの途絶などによってどちらかと言えば好転するよりもさらに悪化する方向への懸念が生じやすい。また近親者や知人に被災者がいる場合、当事者の生活、生計や人間関係に暗い影を落とすこととなり、また少なくとも当面どのように生きていけばよいかということを考えるだけでも大きなストレスが生じうる。

次に不安を増幅する要因として知識不足ということがある。災害に伴って生じる様々な事象、あるいは災害にどのように向き合えばよいか、その方途について多くの人はあまり知識を持ち合わせていない。東日本大震災では原発事故が発生した。我々は放射性物質の挙動、それらに対してどのように対応すればよいか。仮に定量的に計測できたとしてもその量がもたらす危険性をいまだに正しく理解できない状態にある。誰もが災害に対する知識を完全に持ち合わせるということはほぼ不可能と思われる。

そして、不安は被災地、被災者だけのものではなく、災害に関する情報が完全に行き渡らない人々、地域においてもまた生じる。例えば東日本大震災では多くの在留外国人が緊急帰国を果たした。日本人が他国で災害や紛争に巻き込まれそうになれば同様の気持ちを抱き、同様の行動をとることになるであろう。

将来への不確実性、知識、情報、これらを埋め合わせるために正しい理解と、それを可能ならしめる正しいコミュニケーションが必要である。そもそも正しい理解、正しいコミュニケーションとはどういうことか。正確性の問題だけではない。正しい知識や情報を送り出したとしても、受け手の側で変容する、あるいは飽和する可能性もある。在留外国人などにおいては文化的あるいは言語的な壁をどのように埋め合わせるかという課題も生じる。そして事前に満たせる面もあれば満たしがたい面もある。事前に図られるリスクコミュニケーションや防災学習に関しては多くの研究が行われてきた。他方、災害後に果たすべきコミュニケーションとはどのようなものであろうか。避難所でのコミュニケーション、報道のあり方、風評被害の解消等々やはり課題を解決すべき事柄は様々にある。被災経験を今後の災害に活かすという視点も有効であろう。災害を知るだけでなく復旧・復興のプロセスを知ること役立つはずである。

このような災害後のコミュニケーションのあり方という問題意識に対し、本研究では、被災地の状況及び復旧を英語で伝えるウェブサイトを構築し、モニタを集めて調査を実施し、反応を得ることで、被災地の状況に対し、文化的・言語的フィルタを通して理解がなされる場合のコミュニケーションの困難性や対処策を明らかにすることを目的とした。このために、被災地支援団体のブログ記事を、遠隔地から被災地支援に貢献したいと考える市民団体に英語に翻訳してもらい、独自に構築したウェブサイトより発信していくという形で、ある種の社会実験を行った。以下2. では予め想定した2つの論点について、3. では上述した実験の記録を、4. ではウェブを用いたコミュニケーション、災害後のコミュニケーション、それぞれに関する実験から得た知見をまとめ、最後に5. で総括するとともに今後の課題について整理する。

## 2. 論点

### 2.1 災害後コミュニケーション

1. でも述べたように、私たちの社会は、災害と復旧の過程を被災地以外の者が理解しようとする上で多くの

課題を抱えていると言える。

まずもって、これだけマスメディアが充実した社会においても被災直後の被災地や復旧の全容を早期に知ることは依然として難しい。報道される死者数、行方不明者数はしばしばうなぎのぼりになっていくことがある。概数ではなく確実に把握できてはじめてそれらの情報が配信されていくようになっている限り、そのような展開となることは避けられない。インターネットの普及、特にブログ、ツイッター、動画投稿サイトなどによって詳細な事実が瞬時にして世界に配信されるようになったものの、これらは例えば特定地域の被災者数の総数を伝える手段にはなっておらず、インターネットはマスメディアに取って代わるものとはならない、

インターネットには別の社会的機能が期待されていく可能性がある。例えば Google 社のサービスに見られるように被災に関する情報がウェブサイトに蓄積され、画面上に塗り重ねられていく機能は、従来のマスメディアにおいてはほとんど見られなかった。

何が必要な情報であるか、価値ある情報であるか、受け手の視点に立つことも重要である。第一に、起きている災害の事実関係や全体像を知りたい。そして自らへの、社会への影響を知りたい。受け手が被災地域内に居るか居ないかで求める情報の優先順が変わってくる。被災地域外の立場に立てば被災地からの影響をどのように切り離すかを判断するために情報が収集される可能性もある。それは被災地にとっては厳しい現実である。東日本大震災の発災直後には各国によってインテリジェンス活動が行われたことも報道されている。

そして受け手にどのように理解されるかについては、受け手固有のフィルターが介在することは否めない。自然災害が多い日本に住むゆえに知られている災害に関する知識は多い。東日本大震災直後に報道されたように、日本人は災害について多くを知ってゆえに落ち着いた行動をとっていた可能性がある。経験に基づく知識、理解力がレジリエンスに繋がっている。

翻って、受け手のことを正しく理解した上での送り手のあり方という議論も当然ながら行われるべきである。すなわち、これほどの大災害が国際的にどのような影響をもたらすかを考えれば、どのような情報をどのようなタイミングで発信するべきであったかも、もっと戦略性を持たせられたのではないかと思われる。不安を煽るからといって情報を発信しなければかえって不安が高まることもある。いま配信すべきか否かという判断が常に求められていた。ここでは詳細な議論は割愛するが、このような課題が、わが国のさらなるグローバリゼーションの遅滞とも通じていることは明白である。

以上をまとめると、災害後のコミュニケーションについては、様々な意味での情報の正しさ、コミュニケーションの戦略性などの点から、東日本大震災は我々に多くの課題を突きつけ、かつ今後にも議論の余地を多く残したと言える。

## 2.2 社会ネットワークとウェブコミュニケーション

災害という事象に限らず、社会の中でのコミュニケーションのあり方については様々な課題がある。その一方でインターネットを媒介とした様々なサービス、プラットフォームの提供、またそれらを利用した社会活動は次から次へと変貌を遂げている。そうした中で地区レベルの都市計画(まちづくり)分野を例に挙げてみれば、活動をウェブサイト公表するということが多く行われるようになった。最近ではブログ形式で体裁を整え、簡単な討議を画面上で行うことを可能としている場合も多い。ウェブサイトには知識を蓄積していく機能もある。このようにしてインターネットは知的な活動に代わる社会基盤としての機能を持つに到っている。ウェブサイトを活用したプラットフォームを形成していくプロセスそのものが、まちづくりの重要な要素となっている面もある。すなわち、プラットフォームを運営する担い手は誰か、担い手は何をすればよいか、といった課題解決がまた当該地区(組織)の活動になっていることがよくある。

他方、ウェブサイトを、その活動に関わりのない第三者がどれほど閲覧しようとしているか各方面で疑問が生じている。あるいは第三者も興味深く見ることができるよう質の高い情報発信がどれだけ出来ているかが問われている。何よりも情報のリソースはウェブサイトそのものにあるのではなく、地域に潜在し、活動を通じて顕在化することが一般的である。ウェブサイトだけでは文字通り話にはならない。そして地域、活動という本来のリソースを十分に他者に伝えているかが問われている。

前節に触れた「災害後のコミュニケーション」についても同様である。すなわち、災害後に何が起きて何が被災地の外へ伝えられるべきか、という課題と、それらを広く配信するウェブサイトがどのようなべきかという課題が同時に検討され、よりよい形になっていくべきである。そのようにしてコミュニケーションを円滑化させる仕組みづくりのプロセスを通じ、災害後のコミュニケーションのあり方を考察することが可能となる。プロセスそのものが本研究の実験となっているということである。次章では実験のあらましについて説明していく。

### 3. 実験の記録

#### 3.1 ウェブサイトを中心としたプラットフォームの形成

被災地の状況及び復旧を伝えるウェブサイトを構築し、モニタを集めて調査を実施し、反応を得ることとした。特に外国人に向けて英語で発信することで、被災地の状況に対し、文化的・言語的フィルタを通して理解がなされる場合のコミュニケーションの困難性や対処策を明らかにすることとした。活動およびサイトを *Voices from the Field*(略称 VF)と命名した。下の図は、活動およびサイトの大まかな全体像である。

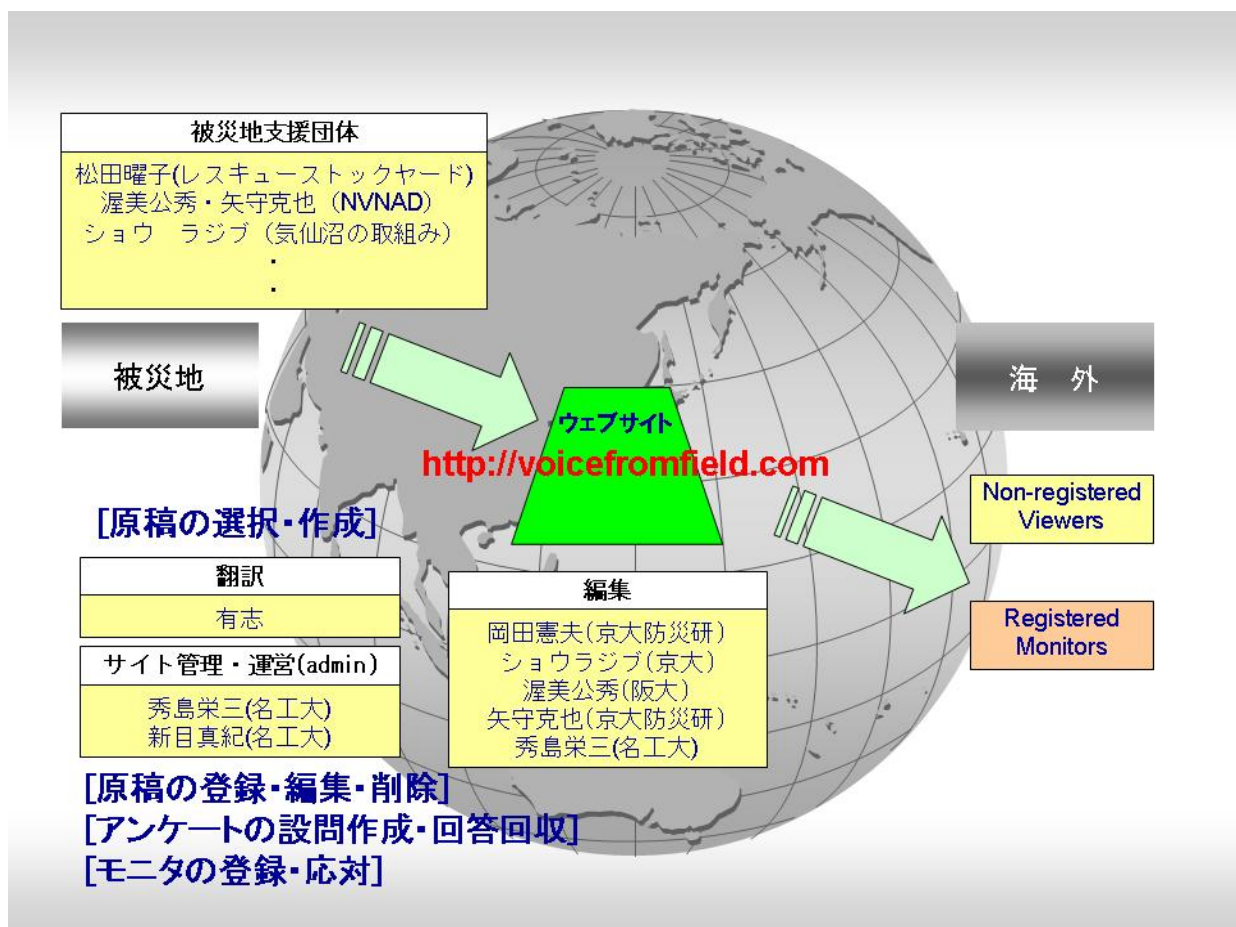


図 Voices from the Field の全体像

作業として、まず e-learning に使われることを目的として開発された簡易ウェブ構築ソフトウェア moodle を用い、レンタルサーバ上にウェブサイトを立ち上げた。そして遠隔地から被災地支援に貢献したいと考える市民団体に、被災地支援団体のブログ記事などを英語に翻訳してもらった。関係者周辺の留学生や海外の研究者等にモニタ就任を求めた。このようにして運営側で登録したモニタ(registered monitor, 略称 RM)はアップしていく記事に対し、各自で自由にコメントをアップロードして公表することができる。いわゆる一般的なインターネット掲示板と同様である。ウェブサイトはもちろん一般にも公開し、広くからの閲覧を可能とした。

トップページは、何度かの修正はあったが、下の図のようにデザインした。トップページ情報に、一連の記事を掲載するコーナー、VfF のミッション、モニタ登録について、関係者の紹介、それぞれのコーナーに接続されるボタンを配置し、その下には最新の記事が最上段に位置するようにして見出しを並べるようにした。

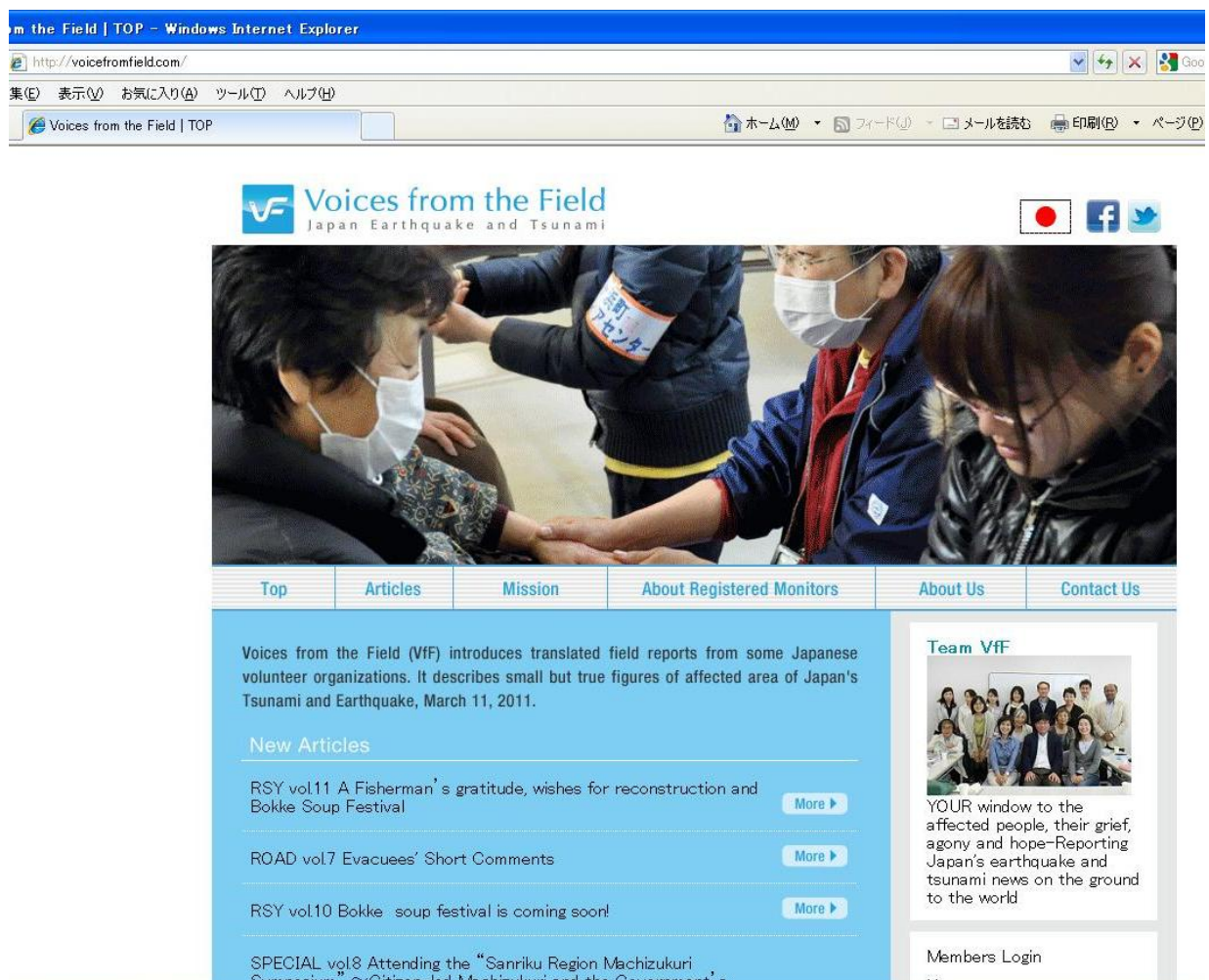


図 VfF トップページ(下方省略)

次頁に記事の一例を掲載する。これは、特定非営利活動法人レスキューストックヤードが東日本大震災に向けて独自に立ち上げたウェブサイトにおける、被災地支援の取り組みに関する記事を英語に翻訳したものである。同法人は震災前から繋がりがあった宮城県七ヶ浜町に入り、現地関係者と協力し、既往災害に於ける経験に基づく知恵と資源を投じ、復旧活動にあたった。その中には被災者の心理的なケアなども含まれている。この記事では当該団体による七ヶ浜での取り組みの概要を説明している。第三者、特に外国人には記事で取り上げられている箇所の位置関係がわかりにくいことから、googlemap を用い、必要に応じて記事に地図を添えることとした。同様に特定非営利活動法人日本災害救援ボランティアネットワーク(NVNAD)、日本財団

の取り組み、一部関係者の取材に基づく記事を掲載していった。

原稿の作成にあたっては翻訳団体、研究者が集合して綿密な翻訳活動にあたった。そこでポイントとなったことは、まず被災地支援団体の記事をもとに、災害を知らない人に向けての説明、現地を知らない人に向けての説明、日本や東北地方の固有文化を知らない人に向けての説明、英語にはない語句、心的表現などの意識に際して慎重な検討が必要であったということである。結果的には元記事にはない補足説明がかなり必要となった。しかし文章が長すぎることでかえってわかりにくくなる可能性もある。一回の掲載でこれらの要件を完全には満たせない場合もある。そのようなときにモニタ(RM)からのコメントが有用となる。

 **RSY vol.1 - Prologue**  
by Voices from the Field Admin - Tuesday, 2 August 2011, 11:03 AM

Shichigahama-machi, surrounded by seven beaches, is a small town with a population of just over 20,000. It seldom appears in the media.



enlarge by clicking

Five years ago, Mr. Nobuyuki KURITA, the director of our voluntary organization, Rescue Stock Yard (RSY), had an opportunity to give a lecture here, and since then, the Shichigahama Council of Social Welfare has been supporting our organization as a member of RSY. Thanks to this relationship, RSY successfully managed to start its recovery support service in this town on March 24.

Currently, we are engaged in activities such as offering foot bath services at the evacuation shelters, serving meals for volunteers, and visiting households in the affected area to find out what they need.

図 VF記事の一例(下方省略)

記事を掲載した結果としてモニタ(RM)らから次頁に示すようなコメントを得た。ここでは、地図がないと現地与東京や福島との関係がわからない、という指摘がなされ、これを受けて運営側は上述のような地図を記事に加えることとした。それを受けて他のRMも、記事がよくわかるようになった、という感想を述べている。また、他のコメントにおいては、VFに関するものだけでなく、被災地に関してRM個人がわかったこと、考えたこと、わからないことについての質問などが寄せられた。質問については運営側だけでなく被災地支援団体からの回答をコメント欄に掲載することでコミュニケーションが続けられたケースもある。

On April 23, we also opened Kizuna-kan Volunteer Center, which serves as the base for our activities. We now open and run the Ochanomi (Tea Break) Café, and occasionally meet there together with local volunteers.

On April 24, local youths took the initiative to develop a new project titled, "Pave the Way for the Future of our Junior High and High School Students", and adopted the slogan of "Yappari Shichigahama! "(After all, our Shichigahama is the best!)

We will keep supporting local people to work out a bright future of Shichigahama.



#### Re: RSY vol.1 - Prologue

by Sharon Corologos - Thursday, 28 July 2011, 10:38 AM

Shichigahama sounds like a caring community. Is there a way to add more pictures to the various entries? The cooking picture with the previous entry brought the story to life.

And a map would add a lot, too. I wondered as I read this, where is Shichigahama in relation to Tokyo or Fukushima?

[Show parent](#)



#### Re: RSY vol.1 - Prologue

by Voices from the Field Admin - Monday, 1 August 2011, 11:50 AM

Thank you for your advice. We will add the map and the photograph to the article. Your understanding is greatly appreciated.

[Show parent](#)



#### Re: RSY vol.1 - Prologue

by Sharon Corologos - Friday, 12 August 2011, 11:43 PM

Thanks so much for the map!

[Show parent](#)



#### Re: RSY vol.1 - Prologue

by Urvashi Fernandes - Monday, 29 August 2011, 12:05 AM

I find all these articles really interesting and I would also like to say thank you to Sharon for asking interesting questions 😊 because yes the map is really helpful 😊

### 3.2 活動プロセス

Voices from the Field の活動では、およそ月1回の例会を行い、研究者と翻訳者が集まった。記事の編集会議が主なものであり、他方、サイトの技術的な修正、研究者、被災地支援団体との意見交換を行った。関係者が頻りに集合することは不可能であることからメーリングリストも多用した。

VfF の活動が軌道に乗るまでのプロセスは次のようであった。

平成 23 年

- 4月18日 VfF の活動を実行することを決める @岩手
- 5月 7日 検討会@豊中:大枠の決定, ML 作成
- 5月20日 京大防災研緊急特別共同研究応募
- 6月 3日 ウェブサイト(暫定版)開設, 登録モニタ募集開始
- 6月18日 検討会@豊中:サイト改良, 操作確認等
- 6月27日 ウェブサイト(正式版)開設
- 7月23日 検討会@豊中:twitter, Facebook 活用
- 8月27日 検討会@豊中:日本語版もつくる

6月よりモニタ(RM)を集めていったが 30 名程度に留まった。さらに記事に対するコメントを投稿する RM は数人に限られた。モニタに対するアンケート調査も行ったが完全な回答は2, 3件程しか得られなかった。Facebook を使って周知拡大を図った。モニタ拡大が実質的に本プロジェクトの最重要課題となってしまった。当初は twitter も使おうとしたが、数十字の文字情報で活動やサイトを紹介することは困難であり、これによるモニタ拡大の効果もほとんど見込めず、ほぼ実行されていない。



図 Twitter での記事アップロードの告知



以下には毎回の例会の議事録(簡単なもの)を掲載する.

2011/7/23

主なテーマ:今後の翻訳記事の選定と、翻訳体制について。

(記事翻訳予定は添付エクセル参照)

翻訳チームは、ある程度期限をきめて、まとまった記事を訳す通常グループと、お仕事をお持ちの方を中心に、催促なしのゆっくりグループにわかれて作業をする。

通常グループは、RSY の記事のうち、いくつかは、ある程度形になった。新たに記事のご提供をいただければ、すぐにそちらにかかることを前提に、当面、RSY の記事をそのまますすめる。

ゆっくりグループは、「つぶやき集」の翻訳にあたる。「つぶやき集」の内容の編集の責任者は○が担当しますが、実質的には△さんにも補佐をお願いします。

2011/8/27

主なテーマ:RM が飛び入り参加して、サイトの使い勝手を議論する

つぶやきプロログですが、9/10 に公開できるように準備しております。

新しいつぶやき記事は×さんが提供する。

⇒<http://road-nf.typepad.jp/michi/2011/08/post-6246.html>

⇒<http://road-nf.typepad.jp/michi/2011/08/post-32c1.html>

プロログの公開に併せて Top ページもリニューアルする。

RM への対応

→RM にコメントを頂いたら、24 時間以内に Thank you メールを出す。

→ユーザ登録をして、パスワードが完了した RM には Welcome メールを出す。

→リニューアルする Top ページに moodle へのログインボックスを表示するようにし、モニタがいつでも一覧記事を見えるようにする。

→Moodle 上で、読んだ記事を、自国語で書いてもらってもいいですよというメッセージを出していく。

(記事を書くだけであれば、現状のままで各国の言語入力が可能です)

今後は、FaceBook、Twitter でリーチを広げ、Web で、もっと知りたい人やディスカッションしたい人を Let's learn each other.の姿勢でサポートできるように改善していきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

2011/10/1

主なテーマ:○先生のレクチャー

「は」と「が」や「を」が意味するものの説明。

「英語世界の表現スタイル」-「捉え方」の視点から、吉村公宏著、青灯社 p21-28 についての説明。

前々回でしたか、パラグラフの中では、論理はひたすらまっすぐに展開される。よってその中では繋ぎの副詞や接続詞は不要だということ。

この研究は、カプランという米国の研究者で、彼は各文化圏が好む分使用の書き方(癖)がパターン化できることを実証的に示した。

英語圏は直線型、東洋圏は渦巻き型、セム語はジグザグ(行きつ戻りつ)進行階段型、ロマンス語やロシア語は、一度行き掛け・後は回り道で最後は(追手を巻くように)行き先にたどり着くという型(「下膨れ Z 型」とでも呼びましようか)だということ。もちろん、同じ文化圏でも話し手によって、直線型から、下膨れ Z 型まで分布している。その中で、特に平均的なのが、このパターン分けに当てはまる。  
本日はロシア語の※さんが来られましたが、ロシア語についても伺いたい。

2011/11/26

主なテーマ:○先生のレクチャー

○先生から出た VFF サイトへの要望

1. Top ページの○先生の名前を削除する
2. VFF の日本語タイトルを入れ、検索でひっかかるようにする  
候補としては、「被災地からの風」でした。

3. March11 2011 という日付けが残るようにする

4. 日本語サイトを作るようにする

→日本語記事へのリンクが目立たないので、国旗をリンクにつかうのはどうかという

その他

RMからのメッセージをどのように翻訳するか、★さん達がとった写真を Top ページに載せてはどうかといった意見もありました。

RM へのアンケートが 5 通しか返ってきていないことを報告したところ、みなさんが協力して声をかけて下さるとのことでした。

VFF の日本語名を付ける。

これはあくまで非公式名で、公式名は英文のとおりのままで良い。

趣旨は国内で検索されたりする方に気づいていただきやすいこと、日本から見た意義について簡単な言葉で表す、ということです。

たとえば「届け世界に、被災地の声: Voices from the Field」といった感じ。

2011/1/28

主なテーマ:つぶやきの翻訳について

文脈や市町村に位置関係が分からないと非常に理解しづらいつぶやきがある。

あれは、相当説明を加えないと、なかなか意味が分からないと思うので、除外するというのも選択肢の一つかと思いますが、どうでしょう。もし残した方がよいと思われれば、富岡、川内、三春、そして郡山、これら4つの地域の位置関係のみならず、それぞれがどう関係しているのか(出身地がどこで、仮設住宅がどこにあり、町役場がどこにある、等)について説明文が必要になると思います。

例えば、東京に 2 週間滞在していた人のつぶやきを、Living ではなく Staying にするとか、いくつか細かく修正する提案があったかと思います。

「RMからのコメントを現地に届けること」

皆さんご存知のように、被災地レポートについて☆さんからコメントをいただいております。

What a good idea to forward words of encouragement to the affected people on site!

It will be an organisational challenge though, to find the translators and then to decide how to deliver the

messages to the people

(do they even have internet access? or maybe a newsletter?).

1.RM のコメントをどのように伝えていくか？

Web サイトは見られないと思う。

福島以外は、仮設住宅に広報誌が届いているので、それに掲載してもらおう。

白浜町には、△さんが、全国からの声を届ける方法があるかを確認する。

その他の意見

・Uさんにコメントを伝えてもらう

・誰かに、こんなコメントがきているという記事を書いて、載せてみる

2.今後のこのプロジェクトの進め方について

1 年間は続けましょうということで、開始したプロジェクトですが、次回までに今後どうするかを皆さん考えてきて下さい。

・皆さんがやろうと思うなら続けてもいいと思う。ずっとはわからないけれど、1 年なら続けられるというのでもいいというものもある(○先生)

・1つのまとめ方として、この翻訳を出版して配れるようにする(○先生)

・英語を学ぶための教科書にするのも手だと思う(○先生)

3.VF サイトの日本語タイトル

「東日本大震災 今を生きるひとたち」に決定

4.日本語記事へのリンクについて

・1つの記事を1つの Window で出すようにする(★さん)

・RM のコメントなどで日本語になっていないものは全て日本語化します。(◆さん)

・原稿を作成する過程でできた原稿も全部管理してほしい(○先生)

・途中過程を保管しておくのは社会学的に重要だと思う(※さん)

5.英語原稿がどのように作られてきたのかを文章にまとめる(○先生から□さんへの依頼)

この記事が英語にするのは豊中のかたにお願いする。

2012/3/18

主なテーマ:まちづくり定義について

まちづくりをまず定義することで良いのではないかということになりましたが、

ポイントは、

①Tさん あるべき姿としての「まちづくり」は住民が主体的で主導的に進めるものであるはずという点がまず説明されなければなりません。

私も本来まちづくりという言葉に託されているのは、そのようなものであるべきと考える。

②しかし、世間で流布している「まちづくり」はかなりニュアンスが違って、特に行政はこの10年来この言葉を行政用語に仕立ててしまっています。それ自体は決して悪いことではありませんが、住民が主体的で主導的に進める「まちづくり」という意味合いは薄まってしまって、むしろ行政が体的で主導的に進め、そこに住民も参加する(参加させてもらっている-大阪弁では寄せてもらっている)立場を与えられている、という意味で使われることが多くなっています。行政の人はそのことが本来の意味からずれていることすら気がつかずに、paternalistic に「まちづくりに寄せて上げる」という態度で臨むことが多い。

そこがTさんの痛に触った、ということだと解釈されます。

③ということで、私はそのような状況を少し補足的に説明する文章を挿入した方が良いと判断し、著者には後で説明して断るとして、若干の補足とニュアンスの違いを表現上シグナル化することを試みてみました。

以降、活動資金は定かではないが新年度以降も活動は続くこととなった。

### 3.3 ウェブサイトへのアクセスログ

記事の投稿・修正、登録モニタ(RM)およびビューワ(閲覧者)による閲覧や投稿についてはログを採取している。膨大であるため、下図にその一部のみを掲出する。

	A	B	C	D
1	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 10:56 PM	31.178.7.2	forum view forums
2	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 10:56 PM	31.178.7.2	forum view forums
3	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 10:56 PM	31.178.7.2	forum view discussion
4	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 08:13 PM	178.73.17.204	forum view forums
5	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 08:13 PM	178.73.17.204	forum view forums
6	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 08:13 PM	178.73.17.204	forum view discussion
7	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 07:01 PM	65.52.109.152	forum view discussion
8	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 06:32 PM	180.76.5.176	forum view discussion
9	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 06:25 PM	157.55.16.56	forum view discussion
10	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 05:33 PM	157.55.16.56	forum view discussion
11	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 01:18 PM	46.109.176.150	forum view discussion
12	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 01:18 PM	46.109.176.150	forum view discussion
13	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 12:18 PM	109.230.246.24	forum view forums
14	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 12:18 PM	109.230.246.24	forum view forums
15	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 12:17 PM	109.230.246.24	forum view discussion
16	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 09:03 AM	66.249.69.108	forum view discussion
17	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 08:33 AM	180.76.5.173	resource view
18	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 07:56 AM	180.76.5.183	forum view forum
19	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 07:27 AM	46.17.98.221	forum view forums
20	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 07:27 AM	46.17.98.221	forum view forums
21	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 07:27 AM	46.17.98.221	forum view discussion
22	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 07:26 AM	157.55.16.56	forum view forum
23	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 07:11 AM	180.76.5.162	forum view discussion
24	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 06:38 AM	180.76.5.51	forum view discussion
25	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 05:40 AM	157.55.16.56	forum view discussion
26	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 01:22 AM	46.17.98.221	forum view forums
27	Voices from the Field	Sat 31 December 2011, 01:22 AM	46.17.98.221	forum view forums

図 ウェブサイトへのアクセスログ

また、アクセス解析を行うために Google 社の解析ツールを用いた。その結果については膨大であるが、残念ながら有用な知見は得られていない。記事をアップした直後、Facebook において記事のアップを告知した直後に一定量のアクセスが見られるが次第に低下していく。下図にその一部を掲出する。

ユーザー サマリー

2011/10/01 - 2011/10/31

● 訪問数全体の 100.00%

サマリー



このサイトのユーザー数 40

- 訪問数: 95
- ユーザー数: 40
- ページビュー数: 186
- 訪問別ページビュー: 1.96
- 訪問の平均滞在時間: 00:02:51
- 直帰率: 70.53%
- 新規訪問の割合: 35.79%



言語	訪問数	訪問数 (%)
1. ja	68	71.58%
2. en-us	22	23.16%
3. ja-jp	3	3.16%
4. en	1	1.05%
5. ja-jp-mac	1	1.05%

図 アクセス解析結果(2011年10月1日-2011年10月31日までのケース)

4. 実験から得た知見とまとめ

・災害後コミュニケーションについて

活動を通じ、特に翻訳作業を中心として災害と被災地の復旧プロセスを他者に正確に伝えることの困難に直面した。地域の特徴、方言に込められたニュアンスを理解し、被災者の受け止め方の多様性を理解する必要があった。

翻訳団体やサイト運営者など多様な主体の間でこの認識を共有していくプロセス自体がおおいに観察に値するものとなった。その際に、災害に係る学理など予め学習あるいは準備しておくことが可能なものもあれば、そうではなく個別の災害に、個別の地域に固有の事情を踏まえ、新たに知ることとなる事実もあった。前者につ

いては専門家がコミュニケーションのネットワークの中に含まれていることが有効である。後者については運営者が被災地あるいは被災地に精通した人物とコミュニケーションを取ることが有効となる。本研究では結果的に大きな困難に直面することはなかったが、今後同様の取り組みを行う場合に、これらの専門家を人的ネットワークに組み込むことが重要であることが知見として得られた。

#### ・ウェブを通じてのコミュニケーションについて

モニタリング結果からは、被災地の状況を一片の記事だけで理解することは相当に難しく、双方向的なコミュニケーションの重要性を改めて認識した。ウェブコミュニケーションは双方向性を高めてきている。とりわけ Facebook では文章だけに終わらない方法で相互的信頼関係を高める工夫が為されていると言える。Wikipedia における辞書構築プロセスに見るように分権化も進んでいる。本研究では必ずしも多くのコメントを得ることができなかった。双方向性を具現化するには何らかの障害があったものと思われる。

現状では実行されたコミュニケーションのプロセスを解析するために Google Analytics などがあるが、これだけでは閲覧者の閲覧後の行動の変化などを捕捉することは不可能である。事実上、ウェブサイトの効果を統計的に検証することは無理に等しい。これは VIF に限られた話ではない。ウェブサイトを構築・管理するには相応の支出が必要であることから、場合によっては事業としての費用対効果が問われることとなる。そうした場合のウェブサイトの効果検証のあり方については改善の余地があると言える。

本研究では、そのような問題を解消すべくモニタ登録を行い、モニタリングを追跡することを企画していた。しかしながら反応を継続的に得ることがほとんどできなかった。顔を合わせたことがない運営者に対し、コミュニケーションを続けることは RM にとっても分厚い壁があったかもしれない。これもまた今後の課題である。

## 5. おわりに

以上、被災地支援団体のブログ記事を翻訳、発信し、モニタ調査を実行することで、そのプロセスのあり方とともに災害後のコミュニケーションのあり方、今後の可能性について考察を行った。その一方で全作業を通じて以下の課題が今後に残された。

- 1) 災害後に社会一般が抱く「不安」と今後起こりうる災害への認識の変化を捉えることの重要性を改めて認識した。他の同様な取り組みも観察しつつ、post-disaster communication とその効果を総合的に捉え直すべきである。有効かつ平易な知見を導き出すためには、定量的分析を行えるだけのモニタリングデータを確保することが求められる。
- 2) モニタによる反応を得て一定のコミュニケーションを果たしてきたが、被災地訪問を通じ、被災地と外部社会のギャップを埋めるコミュニケーションもまた重要であることを認識した。被災地へのフィードバックを通じてコミュニケーションの質的な充実を図るべきである。
- 3) ウェブサイトを用意するだけではコミュニケーションを深めることはできず、多様な主体と行動によって具現化されるコミュニケーションプラットフォームを通じて様々な要望や期待を受けてきた。この種のプラットフォームは各方面で展開されているところであるが、費用を伴っていることから、その社会的実効性を明らかにすべきである。

平成24年度もVIFの活動を基本的に同様に継続する。その中でこれらの課題に取り組んでいくこととする。

## 参考文献

- 1)伊藤孝行,“マルチエージェントの自動交渉モデルとその応用”, 知能と情報(日本知能情報フレンジ学会誌) Vol.22, No.3, pp.295-302.
- 2)Takayuki Ito, Rafik Hedfi, and Katsuhide Fujita, “Towards Collective Collaborative Design : An Implementation of Agent-mediated Collaborative 3D Products Design System”, International Workshop on Multi-Agent Systems and Collaborative Technologies (CDROM).
- 3)Norio Okada: A Scientific Challenge for Society under Sustainability Risks by Addressing Coping Capacity, Collective Knowledge and Action to Change: A Vitae System Perspective, Journal of Natural Disaster Science Vol.32, No.2, 2011.
- 4)Rajib Shaw, Danai Thaitakoo, eds.: Water Communities, Community, Environment and Disaster Risk Management Volume 2, Emerald Publisher, 2010.
- 5)鈴木亮平,藤澤徹,秀島栄三,インフラストラクチャー概念に関する基礎的考察,日本都市計画学会中部支部第19回研究発表会梗概集,pp.25-28,2009.
- 6)Yukiko Takeuchi, Wei Xu, Yoshio Kajitani and Norio Okada: Investigating Risk Communication Process for Community's Disaster Reduction with a Framework of “Communicative Survey Method”, Journal of Natural Disaster Science Vol.32, No.1, 2011.
- 7)花田大輝, 山崎雄一, 秀島栄三, 社会ネットワーク分析法を用いた協働型事業の形成と運営に関する分析,日本都市計画学会中部支部第21回研究発表会論文・報告集 pp.33-34,日本都市計画学会中部支部,2010.
- 8)秀島栄三,吉村輝彦,まちづくりにおける協働化と事業遂行の同時性に関する考察,日本都市計画学会中部支部第19回研究発表会梗概集,pp.41-44,2009.
- 9)秀島栄三, 流域環境への意識を啓発するためのウェブサイトの制作と効果の検証,日本計画行政学会全国大会研究報告要旨集pp.238-241,日本計画行政学会2011.
- 10)藤澤徹,秀島栄三,北村直之,地域社会の課題解決に向けた住民討議プロセスに関する実験的分析,社会技術研究論文集Vol.5,pp.88-95.
- 11)松田曜子: 都市における冗長的ネットワークとしてのボランティアの存在に関する一考察, 第44回土木計画学研究発表会,CD-ROM(3),2011.
- 12)矢守克也, 渥美公秀, 近藤誠司, 宮本匠:ワードマップ 防災・減災の人間科学, 新曜社, 2011.

※本研究に関してこれまでに以下の発表を行っている。

・秀島栄三,松田曜子,岡田憲夫:被災地の状況と復旧過程を正しく伝えるためのウェブサイトthe Voices from the Fieldの運営について,第6回防災計画研究発表会, 2011.9.22.

・Eizo Hideshima, Yoko Matsuda and Norio Okada: Operation of a website “the Voices from the Field” to communicate correctly the situation and the recovery process in the disaster area, International Conference on Crisis and Emergency Management, 2011.9.25.

付録(別ファイル): ページビュー記録 20111001-20111031~20120301-20120331 計6ファイル.